和文讀本巻二

稲垣千穎輯

地理

伊勢國

本居宣長

伊勢國ハかた（傍）國のうまし（美）國と古語にもいひて北のはしより南のはてまで西の方ハ山々つら（連）なりつゞき（續）てまことに青垣をなせり東の方ハ入海にていせの海といふこ（ウミ）れなり―かくていづこも山と海との間廣く平原にして北ハ桑名

より南ハ山田まで廿里あまりがほど山といふ物なくひらのも越ゆることなくひとつゞきのくにばらなるを此間に廣き里々多かる中に山田安濃津松坂桑名など殊に賑はゝしく大なる里なり夫あら京より江戸までなる國や國を經てゆく間にかばかりの大里ハ近江の大津と駿河の府とをおきては有ることなしほかの國々も思ひやらるなほ件の里々につぎて四日市白子などよき邑あり

かくて此の國海の物山野の物すべてところがら暑寒も他の國にくらぶるにさしも甚しからずたゞしさむさは北の方へよるまゝに次第に寒し風ハよく吹く國なり

國此賑はゝしきことハ大御神の宮に詣づる旅人たゆることなく殊に春秋のほどハいとゞにぎはゝしき事大かた天の下にならびなし

土肥えて稲いとよしたなつ物もはたつ物も大かた皆よし

かくて松坂ハ殊によき里にて里の廣き事ハ山田につぎたれど富る家おほく江戸に店と

いふ物をこしらへおきて。手代（テダイ）といふものを多くあらせて。あきなひ（商）せさせて。あるじ（主）ハ國にのみ居て遊びをり。うはべ（表）ハさしもあらねど。うちハいたく豊におごりて渡る（世ヲ）。―すべて此の里町をおゆのさく正しからず。家なみもわろく。一ッごとに一尺二尺づゝ出入りて。ひとしからず。いとしど（乱）けなし（猥）。家居ハさしもいかめし（壮）からず。されど内々のすまひハいとよし。水ハよき所とわろき所とありて。よろしからず。川水すくなく。潮もさゝねバ。船通ぜず。山へも一里あまり。海へハ半里あまり。諸國のたよりよし。ことに京・江戸・大坂ハ。たよりよし。諸國の人の入り来る國なれバ。いづこへも便よし。―人の心ハよくもあらず。おごりてまこと（實）少し。人のかたち。男も女も。ゐなかびたるかたさらになく。よろし。女ハ。里の豊に賑はしきまゝに。姿よそひよし。すべてをさ〳〵京におとれる事なし。人の物いひハ。尾張國より東の國々ハなまり（訛）多きを。伊勢ハおほかたなまりなし。

けれど。山城・大和などハ。何となく聲いやし（鄙）。詞もいやしき事多し」いはゆる呉服物。小間物のたぐひハ。よき品を用ゐて。山田・津などハ。ことな（特）く代物よし。されど。商人の京よりしいるゝも。松坂にてこそ物よく。上々の品あり。京のあき人常に來通ふあり」時々のはやり物も。をり（時）過さず」諸藝ハ。所がらにあはせてハ。よきもあしきも」もろ〳〵の細工。いと上手あり」神社佛閣。すべておほかし」すべて此の國ハ。他國の人おほく入りおむ國なる故に。よからぬ物もおほく。盗なども多し」松坂ハ。魚類。野菜などすべてゆたかなり。されど魚にハ。鯉・鮒少く。野菜にハくわゐ（慈姑）・蓮根など少し」松坂のあかぬことハ町筋（スヂ）の正しからず。しどけなきと。船の通はぬとなり」

此文すべて記万葉等の古書に見えたる名を本にしてのせたれバ其心してみれバ文意のさとりがたき所もあるべし

紀の國の名所ども

本居宣長

待乳（マツチ）山ハ。大和國の堺にて。紀の國の伊都郡なり。角田（スミダ）川ハ。まつち川のことなるべし。此の川。みな

をしハ萬紙りのうちゆうりゝで。北鳳田ゟ流
るゝ。紀の川をあつるゝ。紀の國ハ紀州藩領より
紀國止名里郡をこゆて雑賀山をゆ。南の能谷
より山口村迄に神中郡。宅山の關守とゝる白
鳥郡をこゆ。宅山の關守とゝる。雑賀山
八。紀三井寺の奇。ある名所也。濱八海士郡賀茂
浦の南北少。北田倉崎の名所ゟ。ある。里
人江言傳へたゝるとゝ。吹上濱八。若山の西南にて
若山の浦北ゟ八。雑賀ゟ。言ゟ。八。若若山のうちま

濱とゝ。名所。小野町ゟ。ゆ。あり。て。姫子社ゟ。ある。
をこゝ。ゟ。名所。ゟ。ゟ。あり。五瀬の門ゟ。ゟ。
ゟ。ゟ。ゟ。

大村の八町をとり海中ゟ地氏島と云ふ所東西四町おまり南北八町ゟ西ゟ東北ゟ東北ゟ南北ゟ西五町ゟ高北六町ゟ西ゟ北二の島ゟ浦西ゟ西ゟ北ゟ東ゟ東北ゟ南北ゟ西ゟ北ゟ東ゟ東北ゟ南北ゟ西ゟ北ゟ東ゟ東北ゟ南北

に。切目王子社もあり。いはしろ（岩代）ハ同郡なり。切目をすぎて。次に岩代なり。西岩代東岩代とて村あなり。岩代王子社海べにあり。千里濱ハ。岩代の南の邊よりみなべ（南部）までの間一里半ばかりの所をいふ。昔元弘元年七月三日。大地震にて。紀の國千里濱二十よ町がほど。忽陸となれるよし。太平記にしるせり。三名部ハ。岩代の南なり。三名部村みなべ浦あり。其の十町ばかり海中に島あり。これを鹿島ありさて三名部の南に。堺浦といふあまて郡の堺なり。そこまでハ日高郡。それよりあなた（彼方）ハ牟婁郡なり。磯間浦ハ。たなべ（田邊）の王宿（アスカベ）村の南。神子濱つゞきにあり。神島ハその一里ばかり海中にありて。かしまともいへり。しらゝ（白良）の濱ハ。湯崎鉛山と瀬戸との間にありて。里人ハ白濱といへり。此の濱ハ真砂。遠く見れバ雪のごとし。神藏山ハ。新宮より二町ばかり東南にあり。社の説に。天照大神と。高倉下と。二神を祭るといへり。石のはし（階）を六間ばかりのぼりて。上に堂ありて。地藏の像

高倉下命の韴靈の神劍をえて神武天皇に奉らせしこと史にみえたり

をおけりといへり。それを神倉權現といひて。其の外に社ハなし。彼の高倉下命の。神劒を得たりしところハ。こゝなりとぞ。熊野村ハ。新宮に。上熊野。中熊野。下熊野とて。三村あり。三輪が崎ハ。新宮より那智へゆく道の海べなる。新宮より一里半ばかりあるを。けしきよき所あり。佐野ハ。佐野村といふありて。みわが崎のつゞきなり。佐野岡も。村より七八町北にあり。玉浦ハ。那智山の下なる粉白浦といふ所より。十町ばかりにしみなみにあり。はなれこじまといへるハ。玉の浦の南北海中にちり〴〵に岩あれバ。それをいへるなるべし。其の外にハ島もなし。熊野御崎ハ。那智山北下。濱宮よりゆく海への道を。大邊地といふ。その間に上野村といふあり。海中へ長くつきいでたる崎にて。志布の御崎とも。鹽崎浦ともいへり。みさきの神社あり。少彦名命を祭る。此の所の海ハ。のぼり志ほくゞり潮とて。年を重ねて。片潮に流れて。志布の満干に拘らず。いと早く流るれバ。海を渡

る命人のいまゝに所ゝ所あり。有馬村ゝ新宮より北の方へ伊場の郷より六里。藤木より北所の二十町むかう南本あり。ところ荘田神社。まゝ花の窟あり。里人云ゝ公事ゝ大根祭窟とゝ云ゝ此の窟の山。高ゝ十四丈間。四方ありあり。見此此窟の山。伊那郡美濃と藤木多り所。しるしとゝ又成記ゝ山ゝ多の事を藤木これる所ゝ。荘田神社中ゝ花の窟ゝ大神ゝ多ゝ。又樹ゝ神ゝ木ゝ藤荘二本馬ゝ山ゝ大所ゝ多ゝ。二里女

ゝ海中ゝまゝ昔ゝ北の所伊勢ゝ紀の國の堺ゝ多ゝ。二里ゝ人ゝ。鄭の浦ゝ長島荘長島村の一里と云ゝ。上の件。磯間ゝ海ゝ。

勅旌

約大多ゝ蛇ゝ咋蛇也蛇也

今ハ昔陸奥國に住みける賤しき者あり家に數（コノモノ）の犬をかひて常に具して深山にいりて猪鹿をとらする事を晝夜明暮の業とせり狗も主が山へいけバよろこびてあとさきにたちてゆき猪鹿を咋殺させを役とすかくする事を世の人狗山といふなるべしかゝる時ハ食物をもちて二三日（フツカミカ）も山に止ること多し或時また此男例の如く犬どもを具して山にいりて其の夜ハ大なる木のうつ（洞）ぼに入ゐて傍に弓・えびら（箙）・太刀をおき前に火をたき狗どもハめぐりに皆臥したりけり然るに夜ふけて狗どもよくねいりたるに年ごろよくなれかしこき狗ありしが俄に起來りて主に向ひておびたゞしくほえたてけれバ主何をほゆるにやと異（アヤシ）しく思ひて見めぐらせどもほゆべき物なし狗ハ猶吼えやまずして主に向ひておどりかゝりてしきりにほゆ主驚きてほゆべき物もなきにかくあるハ獸ハ主をもしらぬものなれバ人もなき山中にて我をくらはんと思ふならん切

後りやすもたやまで矢を抜きて威し矢を多く
も少しと思ひ起こりやまず矢ふ抜きおけれやかりる
我さ伏ふてくるとひつの蛇ありとみえんと思
ひて弓の不れより外に矢ふ抜きて我が身を防ぎ
給かりの蛇の上の方ふ曙あ方りて物を云ひた
ぬ主ふくべの我をこのなれ長と法光りをれハあ
ら呼りやと思ふ方ふ何ていまハあり主おなを
と矢物釣と共ふ落ちかり釣なふを変をなくひ
つき居たり主見ちき長ふ主落ちり蛇ふ主刀

を四ちさ蛇と切殺ふ〻刀状引障りけ一丁ま
あの赤の上ふ赤蛇の主とけりをたるやそのう
つ冠ふ主ふ引りたる蛇の谷まおしてあり一
狐見て釣ハは主ひりたり釣をまをしてあつ
まりを多ハ内をふんかりりたるまをかりひを
矢恵を刺ふりたりくを其一て家ふ帰りしいりた
器を傳ふ〻りるとは

猟の島を使ふ之ふ古や苔間番

文學士人高雄氏險のこゝろ見まくりけるも手洗川の上流に大多の鵜飼のこゝろ見まくりけるも手洗川の上流に大多の鵜飼三足ありけりしが一の鵜岩にて魚を捕ひ居るを見るに上人おのゝきて思ひ出づるくまを捕ひ出づ上人おのゝきて思ひ出づるくまを捕ひ出づ鵜一回飛び來て捕ひ終れば又鵜の小舟を漕ぎ行くあり又一隻の鵜の小舟を漕ぎ行くあり是は鵜の小舟を漕ぎ行くあり是は鵜の小舟を漕ぎ行くあり是は

あやしう見たるよしとて。きなきち。上人のかたりける事あり」

鴨の類くさぐさ

本居宣長

田中道麿が語りける（コトハ）は。鴨に大小の四くさあり。第一大（キ）なるを（モノ）まがもといひ。次をあぢといひ。次に大なるを（種モノ）ひどりといひ。そ（最）のもちひさきを（モノ）たかべといふ。皆同じ鴨ながら形の大き小さきによりて名のかはれるなり。あぢ。たかべなど。万葉の歌によめり。又あいさといふ一くさあり。これ鴨のたぐひなれども。はきらのまとあり。万葉七の歌に。あきさとあるは。此の物なりといへり」

牛馬犬（徒然草）

卜部兼好

人（ヲ）つく牛をば角をきり。人（ヲ）くふ馬をば耳をきりて其のしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは。ぬし（ニカヽル）のとがなり。人（ヲ）くふ犬をばやしなふべからず。是皆科あり。律のいましめなり」

廐牧律ニ凡馬牛及有觸觝踏咬人而記標拴繫不如法者笞四十疏ニ畜産觝人者截兩角蹹人者絆足嚙人者截兩耳

無益に生類を殺すまじきこと　徒然草

卜部兼好

雅房大納言ハ。ざゑ（才學）かしこくよき人にて。大将にもなさばやとおぼしけるころ。（一院ノ）院の近習なる人。たゞいまあさましき事を見侍りつと申されけれバ。何事ぞと問はせ給ひけるに。雅房卿鷹にかはんとて。いきたる犬の足をきり侍りつるを。中垣の穴より見侍りつと申されけるに。うとましくにくゝおぼしめして。日ごろの御氣色もたがひ。昇進もし給はざりけり「さばかりの人。鷹をもたれたりけるハ。思はずなれど。犬の足ハ跡なき事なり。虚言ハ不便なれども。かゝる事をきかせたまひて。にくませ給ひける君の御心ハ。いと尊きことなり」大かたいける物を殺し。いため。たゝかはしめて。遊び楽しまん人ハ。畜生残害のたぐひなり。萬の鳥獣。ちひさき虫までも。心をとめてありさまを見るに。子を思ひ。親をなつかしくし。夫婦を伴ひ。ねたみ。いかり。欲おほく。身を愛し。命を

南殿ハ紫宸殿なり櫻ハ南階の左の方にあり

をしめること。ひとへに愚痴なる故に。人よりもまさりて甚しかりけるにこそ。それをおもへ。命を奪はんことゝいかでかいたましうおもはざらむ。すべて一切の有情を見て。慈悲の心なからんは。人倫にあらず」

南殿の櫻のこと　古今著聞集

橘成季

南殿の櫻ハ。村上の御時。式部卿重明親王の家の櫻に（他ノ花ニ）異なりとぞ。うつしうゑられけるとて。その後たび〳〵の炎上にやけにけれど。又あらぬ木をぞうゑかへられける。代々の帝この花を賞ぜさせ給ひて。花の宴を行はる。承久に右馬權頭頼茂朝臣がことありし時。やけにけり。やがて造内裏ありし」にまゐらせぬ。大監物源光行が家よりうつしうゑらるゝよし聞えさせしかうゑらるるとぞ。いづれの時の種にてかありけん。なほつゐになし。その櫻もいくそたびとなく焼けぬれバ。今ハあとだになし。くちをしきことなり」

卜部兼好

古竹は、かたたけ。竹の、節遠くはなれて、節のあいだ、すくなくて、節のあるところ、ことに、ちかくなりて、節のあつまりたる竹、ふるき竹なり。

むろの木

田中道昌がいへりし。「むろ」は、紫草の歌のよみ、みなゆるむろの木などいふまがの、かりのことも、多くあるものなり。

まろこ菅の歌万葉集に見えたり

まるすげといふ草　とねりこの木

本居宣長

世にかやつり草といふ草の小きやうなる草の田におひて田夫のいたく（甚）いとふ草あり美濃國にて「こま（生）をまるすげといふ三河國にてハまるすげといふよしありまろこ管（菅）と歌によめる物にもあらじかと田中道麿いへり」

とねりこの木といふ木ハ木の色いと白く葉ハ榎の葉に似て大木になる物なり實ハ  かくの如き形にて上の方ハ葉のやうにひら（扁）なりくだ（件）んの木美濃國飯（ハシノ）木村に多くありてあだし（他）むら（村）にハなしと同じ人いへり飯木村ハこの人此故郷なり（トコロハ）多藝郡なり」

八重櫻ハ聖武の御世に奈良にうゑらせさるよし物にみえたり

家にあらまほしき木草　徒然草

卜部兼好

家にありたき木ハ松櫻（第二）松ハ五葉もよし花ハひとへなるよし（ガ）八重櫻ハ奈良の都にのみありけるを此の頃ぞ世におほくなり侍るなる吉野の

花・左近のさくら・皆ひとへにてこそあれ・八重櫻
ハ異様（コトヤウ）のものなり・いとこちたく（煩）ねぢけたりう
ゑずともありなん・遅櫻またすさまじ（冷）・虫のつき（葉十下二）
たるもむつかし（陋）」梅ハ・白き・うす（モ）紅梅・ひとへ（モヨシ）なる
がとく咲きたるも・重りたる紅梅のにほひめで
たきも・皆をかし（可愛）・おそき梅ハ櫻にさきあひてお
ぼえおとりけおされて（氣壓）・枝にしぼみつきたる・（ホド）心
うし・ひとへなるがまづさきてちりたるハ・心と
く（テ）をかしとて・京極入道中納言（定家）ハ・なほひとへ梅（撤）
をなん・軒ちかくうゑられたりける・京極の屋の
南むきに・今も二本侍るめり」柳（モ）またをかし」卯月
ばかりの若かへで（楓）・（六）すべて萬の花紅葉にもまさ
りてめでたきものなり」橘・桂・いづれも木ハ物ふ
り（テ）大（キ）なる（ガ）よし」草ハ山吹・藤・かきつばた・なでしこ・（チ）
池（ドヨシ）には蓮」（ガヨシ）秋の草ハをぎ（荻）・すゝき（薄）・きちかう（桔梗）・はぎ（萩）・を
みなへし（女郎花）・ふぢばかま（蘭）・しをに（紫苑）・われもかう（地楡）・苅萱・り
んだう（龍膽）・菊・黄菊も・つた（蔦）・くず（葛）・朝顔いづれもいと高
からず（コレテ）・さゝやか（小）なる垣にしげ（茂）からぬよし（ガ）」この

ほか世にまれなるもの。からめきたる名のきゝにくゝ。花も見なれぬなど。いとなつかしからず。大かた何もめづらしくありがたきものは。よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうのものなくてありなん」

言行

高倉院天皇女童に御衣賜はせし御事

平家物語

不知作者或云
信濃前司行長作

陰陽家の説に。天一神のある方をふさがりといひてその方にゆかんとする時。方ふさがれば。他にいでゝ一夜さけて。のちにゆくを方たがへといへり

安元七年のころほひ。御方たがへの行幸のありしに。さらでだに（雖不然）。雞人暁を唱ふる聲。明王の眠を驚す程にもなりしかば。いつも御ねざめがちにて。つやつや御寝もならざりけり。況んやさゆる霜夜のはげしきには。延喜の聖代。國土の民どもが。いかに寒かるらんとて。夜のおとゞ（大殿）にして御衣をぬがせたまひける事などまでも。おぼしめしいでゝ。わが帝徳の至らぬ事をぞ御歎きありけ

女房ハ女官の事にて、即さきの女の童の主なり

る。深更に及で。程遠く人のさけぶ聲しけり。供奉の郎どもハきゝもつけざりしに。主上ハきこしめして。只今叫ぶハ何者ぞ。あれ見て參れ。と仰せければ。うへぶし（宿直）あくる殿上人。上日（當直）の者に仰せて尋ねさせバ。或つじ（辻）にあやしのめ（女）のわらハ（童）の長持のふた（蓋）さげ（提）たるが。なくなくぞありつる。いかにと問へバ。主の女房の院の御所に候はせ給ふが。このほど。漸にしてたゝ（裁）せつるきぬ（衣）を持ちて參るほどに。たゞ今男の二三人まうで（詣）來て奪ひとりてまかり（去）ぬるぞや。今ハ御装束のあらばこそ。御所にも候はせ給はめ。まことはづかしく立宿らせ給ふべき。親しき御方もましまさず。これを思ひつゞくるに。なくなりとぞいひける。さてかの女童を具して參り。そのよし奏聞したりければ。主上きこしめして。あなむざん。何者のしわざにてかあるらんとて。龍顔より御涙を流させたまふぞ忝き。堯の代の民ハ。堯の心のすなほ（直）なるを鑑として心とせる故に。皆すなほなり。今の代の民

も朕が心を以て心とするゆゑに、かたましき（奸）ものの朝にありて罪を犯せ（スリ）りこそわがはぢにあらずや。とぞ仰せられける。さるにて（ツケ）も取られつらん衣は何色ぞと仰せけるが、しかじかの色と（侍リ）奏しき。建禮門院其のころは、いまだ中宮にて渡らせたまふ時なり。其此御方へ、さやうの色したる御衣や候ふと御たづねありければ、先の（キヌ）よりはるかに色いつくしき（鮮）が參りたるを、くだんのめのわらはにぞ給はせける。いまだ夜深しまた（然）さる目にもぞあふとて、上日の者をあまたつけて主の女房の局までおくらせましましけるぞかたじけなき。さればあやしの男賤の女にいたるまでたゞ此君千秋萬歳の寳算をぞいのりける」

「行成卿實方ノ中將に冠おとされ給ひしこと
十訓抄

不知作者

大納言行成卿、いまだ殿上人にておはしける時、

實方中將いかなる憤りかありけん殿上に參りあひていふ事もなく行成の冠をうちおとして小庭になげすてゝけり行成すこしもさわがずしてとのもり（主殿）司をめして冠とりて參れとて冠して守刀よりかうがい（笄）ぬきとりて鬢かい（搔）つくろひて居直りていかなる事にて候ふやらん忽にかうほど（如此程）の亂冠に預るべき事こそ覺え侍らね其の故を承りて後（ナニゴトモ）の事にや侍るべからんとことうるはしくいはれけり實方ハしらけてにげにけり折しもはじとみ（半蔀）より主上御覧じて行成はいみじき者なりかくおとなし（大人）き心あらんとこそ思はざりしかとてそのたび藏人頭あき（闕）たりけるに多くの人を越えてなされにけり實方をバ中將をめして歌枕見て參れとて陸奥國にながしつかはされける（所）やがてかしこにてうせ（卒）にけり

三條内大臣殿のおと　十訓抄

不知作者

（歌枕とハ古くより歌によみならはしたる名所のことなり）

三條内大臣殿ハ大相國實行公の御子公教公なり

三條内大臣御もとにまらうど（客人）まうで（詣）来たりけるに（ヨリ）。隣に公重少将の居られたりけるが。この殿。さぶらひ（侍）と物をいひあがりて。大つぶて（礫）をもてうちける（ニ）。傍の格子をいとおびたゞしくうちかりたれバ。客人けしきおぼえけるに（ニヨリテ）。人をめして。たがうつぞと問はせ給ひたれバ。隣の少将の。えう（細）なき事をとがめてうち候ふと申したれバ。うちなげく。客人に。内へ入らせ給へ。あやまちもぞ出くるとて（イヒ）。我も引入り給ひたれ。又後みうちかり

けれバ。かしこく（怖）ぞ（アル）とぞのりうちいひし。是いかにとてとがめもえ給はで物語しておほせし（ヲミテ）上臈はかくこそあるべけれ」といみじく（オモハレテ）ありがたかりし人なりと其の客人（テ）のたまひ（言）たるとあり（コト）。今の世には不覺におもする（ヒト）とやそしり聞えまし」此の殿は。むげに道心のおはしたる（ヒト）とかや。京極（イヒシ）大納言雅俊卿の。いみじく腹あしくて。いつとな（イフコト）く歯をくひつめて。いかりておはしたるには。似給はざりたる人なり」

公助父にうたるゝこと

古今著聞集

橘成季

武則・公助といふ随身父子ありけり。右近のうま（馬）ば（場）ののりゆみ（賭弓）に・わろく仕りたりしとて・子公助をたれなる所にくうちけるを・にげのく事もなくてうたれけれバ・みな人・いかににげずしてかくハうたるゝぞといひけれバ・えしにげ候ひなバ・衰老の父（ワレラ）追はんとせんほどに・たふれ（倒）などし侍らバ・きはめて不便なりぬべけれバ・かくのごとく心のゆく（満）ほどうたるゝなりと申しけれバ・世の人いみじ（甚）き孝子なりといひて・世のおぼえこれよりぞいできにける」

小松内大臣殿賀茂祭見の事

十訓抄

不知作者

小松内府・賀茂祭見んとて・車四五輛ばかりにて・一條の大路にいでたまへり・物見車ハ・みなたてならべて・すきまもなし・いかなる車か（公ノ）のけ（除）られんずらんと・人々目をすましたるに・ある便宜（祭ヲミルニ）の所

なる車どもを抜引出しけるを見れば。みな人ものらぬ車どもなりけり。つねに見所をとりて。人を煩はさじのためにむな車を五輌たておかれたりけるなり。其の頃の内府にきこえけるをば。いかなる車なりとも。あらそひがたくこそ有りけれど。六條の御息所のふるきためしもよしなくやおぼえさせ給ひけん。さやうの心ばせ。なさけふかし」

日野資朝卿のこと　徒然草

為兼卿中納言にありし時永仁六年陰謀のよし聞えて北條家にめしとられて佐渡に流され給ひし事あり

卜部兼好

為兼大納言入道めしとられて。武士どもうち囲みて六波羅へゐてゆきければ。資朝卿一條わたりにてこれを見て。あなうらやまし。世にあらん思ひ出。かくこそあらまほしけれとぞいはれける」。この人東寺の門に雨やどりせられたりけるに。かたはものどもの集り居たるが。手もあしも。ねぢゆがみうちかへりて。いづくも不具にことやうなるを見て。とりどりにたぐひなきくせ

者あり、尤愛するに足れりとおもひて、まもりたまひけるほどに、やがて其の興つきて見（熟視）にくゝ、いぶせく（汚）おぼえけるが、只すなほにめづらしからぬものにはしかずとおもひて、帰りてのち、この間栽木を好みて、異やうに曲折あるを求めて、目をよろこばしめつるは、このかたはを愛するなりけりと興なくおぼえければ、鉢にうゑられける木ども皆ほりすてられにけり、さもありぬべきことゝなり」

安養尼盗に衣とらせし事　古今著聞集

橘成季

横川の恵心僧都の妹（天元）安養の尼のもとに強盗入りにけり、物どもみなとりていでにければ、あまうへハ紙ぶすまといふ物ばかりを引き著て居られたりけるに、姉なる尼のもとに小尼君とてありけるが、はしりまゐりて見ければ、小袖をひとつとりおとしたりけるをとりて、これをぬす人とりおとして侍りけり、奉るとてもちて來たり

けれバ尼うへのいはれける（コトハ）これもとりてのちハわが物とこそ思ひつらめぬしの心（ニ）ゆるさゞらん物をバいかでかきるべき盗人ハいまだとほくハよもゆかじとく〳〵もちてゆき（行）てとらせたまへとありけれバ門のかたへはしりいでゝやゝとよびかへしてこれをおとされにけりたしかに奉らんといひけれバぬすびとども立とまりてしばしあんじたるけしきにてあ（悪）しく参りにけりとてとりたりける物どもをもさながら返しおきてかへりにけるとなん」（カタリツタヘタル）

松下禅尼明障子を繕ふこと　徒然草

卜部兼好

相模守時頼の母ハ松下禅尼とぞ申しける守をいれ申さるゝことありけるに（ヨリ）すゝけたるあかり（明）しやうじ（障子）のやぶれバかりをきりまはしつゝはられけれバせうと（兄）の城介義景その日のけいめい（経営）して候ひけるが（コレハ）給はりてなにがし（其）男にはらせ候はん（カレハ）さやうの事に心得たる者に候ふと

申されけれバ。その男尼が細工によもまさり侍らじとて。なほ一間づゝはられけるを。義景皆をはりかへ候ハんハ遥にたやすく候ふべし。まだらに候ふも見苦しくや。と重ねて申されければ。尼も後ハさは／＼（潔清）とはりかへんとおもへども。けふばかりハ。わざとかくてあるべきなり。物ハやぶれたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと。若き人に見ならはせて。心づけんためなりと申されける。いとありがたかりけり。世を治むる道ハ。儉約を本とす。女性なれども。聖人の心にかよへり（下略）

才藝

堀河院天皇の神樂を多近方に傳させ給ひし事　體源抄

豐原統秋

多近方資忠にハ幼くておくれにけれバ。神樂の道ハ傳へざりけるを。堀川院資忠が手より。めで

よく傳へしめたりけむ。近方を尋召して。召人の中にこの道絶なバ口をしかるべしとて。近方を免して。近衛の陣に候させて。萩の戸北邊に近くめして。御自ぞ教へ給ひける。但御口うつしに物をば仰られずして。師時卿して傳へ仰られれバ。彼の卿も。聲ぞわるかりけれども。此の道北博士にハなりにけり。おのづから（若）師時候ハざりける時ハ。近方がうたひとらざる限ハ。幾たびもうたひてぞきかせおはしましける。よくなりぬと思召しける時ハ。物をバ仰られずして。御歌をとゞめさせおはしましけり。三年までよるひる近く候ひけるに。御口うつしに物をバ一度も仰られざりけり。古體ありかしや。又くひ物なかりければ。おのづから師時卿なんどのたゝうがみ（懐紙）に飯をいれてたびたりけれバ。それを僅になめづりてぞ。二三日もすごしける。かくしつゝ十六歳にありてぞ。始めて内侍所の御神樂に拍子とりたりけれバ。めでたくて。みかど（帝）より始てほめさ

せれさましけ里」神樂の曲ハ。までに絶えぬべかりけることを。みかどの御口より給ひけるめでたかりける事なり」

後醍醐天皇の九ノ宮北御歌　太平記

北小路玄慧等作

第九ノ宮ハ。いまだ御幼稚におハしましせバとて。中御門中納言宣明ノ卿に預けられ。都の内にぞ御座有りける」此の宮。ことしハ八歳にならせ給ひけるが。常の人よりも。御心ざまさかしくおハしまし〳〵けれバ。常ハ。主上既に人も通はぬ隠岐國とやらんに流され給ふ上ハ。我もかゝり都の内に留りても何かせん」哀我をも。君の御座あるなる國のあたりへ流し遣せかし。責めてハよそながらも。御行末をうけたまはらんかしとかきくどきうちなきまく。御涙さらにせきあへず」さても君の押籠められて御座ある白川も。京近き所ときくに。宣明などを具足して。御所へハ參らぬぞ。と仰ありけれバ。宣明ノ卿涙を押へて皇居程近き

所なりとなん候とぞ。御供仕りて発せん事仕御あるまゝなく候ふべし。白川と申す候ふハ都なる数百里を隔てゝ遥おさへ候ふ。然ハ能因法師ハ都を出て、霞と共ふ出ぬ。秋風ふく白川の関、よりてハ候ハ歌ふて、道の迷ふ程ハ、と迷ふ関ハ、宮御殿を押へ、させ給ハて、詠ん、仰出さるゝ事もなく、なり有りてさて、ハ宮御殿を具して発ち給ふ。白川の関とまゝ、ハ、全く、ハ陽渭水の白川ハ、非毛記の関、数河の名所なり。近どろ津守国夏ハ、是を、求歌ふて、まゝ為たりけるゝ東路の関もて、帰りぬ白川ハ日数へ山もた、歌風をふく、大歌勝

能因歌枕

ゆ、雅知紀良き、ゆ、見しるる者、なるを、ものゝ、ハ、ハ、ハ

しとゞに仰せられけれバ。よろづ物うき御氣色にて。中門にたゝせ給へる折ふし。遠寺の晩鐘幽に聞えけれバ。

つく〴〵と思暮しつ入相の鐘をきくにも（ツ子）君ぞ戀しき（下）

情内に動きてことば外に顯は（テ）御歌のを（長）さ〳〵しさ哀に聞えしかバ。其の比京中の僧俗男女是をたゝうがみ（帖紙）扇（ナド）にかき附て。是こそ（珍しとし）八歳の宮の御歌よとて。翫ばぬ人ハなかりけり」

源義家朝臣の江帥に物學びしこと

古今著聞集

橘成季

十二年云々ハ陸奥の戰ありし也宇治殿ハ關白賴通公なり

江帥とハ大江匡房卿太宰權帥まであがりし故に申す

義家朝臣。十二年の合戰の後宇治殿へまゐりて。戰の間の物語しけるを。匡房卿よく〳〵きゝて。器量はかしこき武者なれども。なほ軍の道をバしらぬと（ナリ）ひとりごとにいはれけるを。義家の郎等きゝてけやけき（異事）ことをのたまふ人かなとおもひたりけるを。さるほどに。江帥出られけるに。やがて義家もいでけるに。郎等。かゝることこそその

孫子に鳥起者伏也といふことと見えたり

たまひつるとかたりければ、さだめてやうあらんとて、車にのられける所へすゝみよりて會釋せられけり。やがて弟子になりて、それより常にまうでつゝ學問せられけり。その後永保の合戰（戦）のとき、金澤の城をせめけるに、ひとつら（一行）の雁とびさりて苅田の面におり（下）んとしけるが、俄に驚きて、つら（行）をみだりて飛歸りけるを、將軍あやしみて、くつばみをおさへて、先年江帥のをしへ給へる事あり。夫軍野にふす（伏）時は、飛雁つら（行）をやぶる。この野に必敵ふしたるべし。からめてをまはすべきよし下知せらるれば、手を分ちて三方をまく時、あんのごとく三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣亂合ひて戰ふこと限なし。されども、かねてさとりぬる事なれば、將軍の軍かちに乗りて、武衡等が軍やぶれにけり。江帥の一言なからましかば、あぶなからましとぞいはれける。

經信卿三舟に乗られしこと　十訓抄

白川ハ京の西ある大井川の一名なり

不知作者

白川院西川に行幸の時。詩・歌・管絃の三の舟を浮べて。そのみちみちのひとびとを分けてのせられけるに。經信卿遅參の間。ことのほかに御けしきあしかりけるほどに。とぞゝのまうしてさゝ參りたりけるが。三事兼ねたる人にて。みぎは（汀）にひざまづきて。やゝどの舟にまれよせ候へ。といはれたりける。時にとりてはいみじくのりける。このくいたん料に。遅參せられたるにこそ。さて管絃の舟にのりて。詩歌を獻ぜられたりけり。三の舟にのるとは是なり」

頼政三位の才能比ぶと十訓抄

不知作者

高倉院の御時。御殿のうへに鵼のなきけるを。あしきことありとて。いのらるべき。といふことにて有けるを。ある人賴政にいさ（射）せらるべきよし申しければ。さり（然）なんとてめされて來りにけり。此の由を仰せらるゝに。かしこまりて宣旨をう

けたまはりて。心中におもひけるハ（コト）。ひるだにもちいさき鳥なれば得がたきを（モノ）。五月（サツキ）の空闇（書）ふかく。雨さへふりて（クラサ）いふばかりなし。我すでに弓箭の冥加つきにたりとおもひて。八幡大菩薩をねんじ奉りて聲を尋ねて矢をはなつ。（二）きくとふるゆうにおぼえければ。よりて見るに。あやまたず中りぬ。天氣よりはじめて。ひとびと感歎いふばかりなし。後徳大寺左大臣そのとき中納言にて。祿をかけらるるに（ヲリ）。かくなん（ヨマレケル）

ほととぎす名をも雲井にあぐるかな。

頼政とりあへず。

弓はり月の。いる（射入）にまかせてとつけたりける。（六）いみじかりけるにまかり出でて後に。

昔ハ養由雲外ニ射レ雁ヲ　今ハ頼政雨中ニ得タリレ鵼ヲとぞ感ぜられける。頼政蟇目の外に。そや（征矢）を取りぐして持ちたりけるを。後に人のとひければ。もし不覺かきたらば。申し行ひたりし人をぞ射ん

がためなり。とぞこゝろへける」

道風朝臣の書比こと　古今著聞集

橘成季

延喜の聖主醍醐寺を御建立のとき。道風朝臣に額書きまゐらすべきよし仰られて。額二枚を給はせり。一まいは南大門。一枚は西門の料なり。眞草兩やうにかきて奉るべきよし。勅定ありければ。仰にしたがひて。兩様にかきてまゐらせけりけるを。眞に書きたるは（カタ）。南大門のがくなるべきを。草の字比額をにしの門にうたれたり。道風これをみて。あはれ（表）賢王やとぞ申されける。その故は草のがく殊にあきをまして（アリト）あぶえけるが。叡慮にかなひて。こく日頃の議あらたまりそうらきたる（六）まゝにこのしこき御もてのらひなるべし。それを（道風）ほめ申すなるべし」

齊信卿拍子のこと　十訓抄

不知作者

後一條院の御時。清暑堂の御神樂に。公任卿拍子

（笏ハとりて拍子をうつ料なり）

とる程きこえあるなるに期に望みて齊信卿上臈にて上に居られたりけるに管絃者にてあらねバ定めてよも承伏せじと思ひて笏をさしやりて氣色だてのりゆづるよしをせられけるに辭せらるることもなくてやがて拍子をとられける思ひぞにあへなくおぼえて始終きくに失なくめでたし事なりけりそれよりこの事ハ御沙汰候ふぞといはせられれバ公事の道にぞ候へばかゝる此ごとく用意仕まつりとぞ答へられけるいみじかりけり

經家馬術の事

古今著聞集

橘成季

武藏國の住人都築平太經家ハ高名の馬乘馬飼ありけり平家の郎等なりけれバ鎌倉右大將めしとりて景時に預けられにけり其比陸奥より大きにたくましき惡馬を奉りたりけるをいかにものる者なかりけりきこえある馬乘どもに面々にのせられけれども一人ものりおほする者

なかりけれバ。幕下思ひわづらはせたまへるまでも。此の馬にのる者なくてやみなんこと。口惜しき（ツキ）事なり。いかゞせんと景時にいひ合せ給ひけれバ。東八ヶ國に今ハ心にくき者候はず。但召人經家ぞ候ふと申したりけれバ。さらバめせとて。則召出されぬ。白き水干に葛の袴をぞ著たりける。幕下が。かゝる惡馬あり。つかうまつりてんやとのたまはせければ。經家かしこまりて。馬ハ必人にのらるべき器にて候へバ。いかにたけき馬（ウマ）も。人に從はぬ事や候ふべきと申しければ。幕下入興せられけり。さらばつかうまつれとて。則馬を引出されぬ。誠に大きに高くして。あたりを拂ひてはねまはりけり。經家水干の袖（ヲ）くゝりて。袴のそば（側）高く挾みて。烏帽子かけして。庭におり立ちたるけしき。まづゆゝしくぞ見えたる。かねて存知たりけるにや。轡をぞもたせたりける。その轡をはげさして。縄（ヲ）とらせたりけるを。少しも事ともせず。はねはしりたるを。さし縄（緤）にすがりて。たぐりよりて乘

アキ前 ゆきんや
[illegible]

りてたまへ・やがて（即）まゐりあがりて出でけるを・少しはしらせくうちとけ見えぞ・のどのど（徐々）とあゆませて・幕下の前にむけてたてりけり・見る者目を驚かさずといふ事なし・よくのらせ「本ノマヽ」・今ハさゆうにてこそあらめとのたまはせける時・ありぬ・大きに感じたまひて・勘當ゆるされて・廐別當になされにけり」かの（此）經家が馬のひける（サマ）ハ・夜中ばかりに起きて・何にかあるらん・白き物を一かえくらけをのれ手づから持來て・必ずかひけり・すべてよるをのれ物をくはせさせて・夜明くれバ・ちゞけ（散）髪をゆ（結）はせて・馬の前にハ草一把もおかず・さらさら（清）とは（掃）かせてぞありける」幕下・富士川あひざはの狩に出られたる時も・經家ハ馬七八ひきに鞍おきて・手綱むすびて・人もつけず・うち放して侍りけれバ・（人々）經家が馬の尻に隨ひてゆきけり・さて狩場にて馬の疲れたるをりにハ・召に從ひてぞ參られ（セケ）ける・このやうに傳へたる者なし・經家いふかひなく入海して死るになれバ・知るものなし・口をしき

おとあり」

和文讀本巻二終

明治十五年十一月十三日板權免許
同　年十二月　出版　定價貳拾錢
同　十八年八月十八日再版御届

編輯　埼玉縣士族
稲垣千穎
東京下谷區仲徒町二丁目廿一番地

出版　普及舍
同下谷區練塀町十四番地

發兌　奎文堂
同日本橋區呉服町六番地